２１世紀の日本のかたち（６３）

—大学の国際化とグローバル人材の育成—

戸沼幸市
＜（一財）日本開発構想研究所 代表理事＞

１．地球人

「私の通った学校は国際連盟にきている人たちの子弟を集めた学校で、一般教養という授業を担当したポール・デュプュイという老先生がいた。

この先生の授業はもっぱら地図を描くことだったが、限られた緯度経度に該当する部分を地図帖のあちこちから探し出して描くのである。こうして世界を一周も二周もする。生徒たちが大体一つの地図を描きあげた頃にその区域についての気候風土や文化歴史の話があった。国境線は描かない。生徒たちの所属国の利害にふれないためでもあった。

地球上にはずいぶんとさまざまなところがあって、いろいろな文明が栄えたり亡んだりしたこと、考え方や生活のちがいの話は印象的であった。デュプュイ先生の授業は、私のその後の行動に直接間接に大きな影響を与えたものだと考える。」[1)]

師匠の自画像

この文章は私の恩師、吉阪隆正先生の残した生い立ちの記の一文ですが、その生涯（1917～1980）は全くグローバル人・地球人といってもよい人でした。父親が国際交流での日本政府代表としてスイス・ジュネーブに赴任していた関係で、3 才から 6 才までと旧制中学の 5 年間をジュネーブで過ごします。小学校と大学（早稲田）は日本でしたが、今でいう帰国子女のはしりです。

早稲田大学（建築学科）を 1941（昭和 16）年 3 月に卒業後、ただちに第二次大戦に巻き込まれ、動員され、中国大陸（東北）に渡っています。敗戦、そして復員して母校早稲田大学に籍を置きつつ、生涯、世界平和の願いを心に刻みつつ、グローバルに、研究・創作・教育などの活動を展開しました。

まず、1950（昭和 25）年、第１回フランス政府給費留学生に選ばれました。当時、世界の建築・都市計画理論を引っ張っていたル・コルビュジエのパリのアトリエでの経験は鮮烈な様でした。東京に妻子を置いての２年間、貪欲にコルビュジエの建築・都市についての理論と造形の方法を吸収した日々の日記を残しています。

20 世紀初頭の西欧発の機械文明批判に裏付けられた、「輝く都市」などコルビュジエの

理想都市の提案、建築などの造形のための人間尺度-『モデュロール』[2] などのコルビュジエの著作を日本に持ち帰り、広く紹介しました。

コルビュジエ設計の建築は、日本では東京上野に在る国立西洋美術館です。この建設には師匠が手助けをしておりました。当時、私は建築学科の３年生でしたが、アルバイトでコルの事務所からの寸法の入っていない図面を、『モデュロール』を片手に、日本式に読みとって図面に画き込む作業をする機会に恵まれました。後に、日本人の尺貫法による古来からの尺度をベースに時間尺も入れて『人間尺度論』[3] を書きましたが、これは師匠が持ち帰った『モデュロール』を私なりに読みとったものです。

師匠は早稲田大学に籍を置いているはずなのに、毎年のように海外に出掛けておりました。ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館建設のために 1956（昭和 31）年、赤道アフリカ横断 1957（昭和 32）年、アラスカ・カナダ・マッキンレー遠征 1960（昭和 35）年と全く地球人でした。

吉阪教授は海外のいくつかの大学（ハーバード大、シドニー大など）に招聘教授として出向いておりましたが、その中で、南米アルゼンチン・国立トゥクマン大学に 1961～62（昭和 36～37）年の２年間、家族ぐるみで出掛けておりました。

「当時、早大内では、何でそんな後進国へ行くのか、一体何を習ってこれるのか、といった明治時代の留学生への期待みたいなことをいわれた。もうそんな時代ではない。世界の大学に伍してサンパウロの国際コンペでは一位を占めたではないか。こちらの持っている知識技能を分けてあげることも考えるべきときではないか。などと、当時はかなり反撥もしたのだった。」[1]

自宅書斎の吉阪隆正先生

写真：INAX ギャラリー「吉阪隆正展」パンフレット（1987）

当時私は博士課程にいたものの指導教授が日本におらず、時々トゥクマンからの手紙での通信教育でした。それは、南米アルゼンチンの地理、地形、気象、そして当時のあくせくとした日本とは対照的な第三世界の人々のゆったりとした生活ぶりが記されたものでした。1960 年代、先進国をめざす日本の都市の在り方を研究のテーマにしていた私としては、正直、面喰うものでした。

通信教育を横目に、私自身は２年間ひたすら日本列島の都市や村を、北海道から四国、九州、本州中を、未舗装の道路事情の中、ボロ車を借りて見学して歩き廻っていたのですが。

トゥクマンから帰国されてからの師匠の長期海外滞在は無くなりましたが、短期出張はしばしばで、キューバ、台湾、韓国、印度な

どの都市や農村の調査に学生たちを連れて出掛けてゆきました。これには私も何度かお供をしましたが、大学における教育研究のフィールドは世界大でした。

２．大学紛争

1960 年代後半から 70 年代にかけて、世界中に大学紛争が起きておりました。これに呼応するかのように日本の大学でも学園紛争の嵐が吹き荒れ、私の所属していた早稲田大学も教室などが学生によって封鎖された状態が続きました。

この時期、1969～72 年、師匠は理工学部長に選出されてしまいました。「教育とは彼らを一本立ちしてゆけることをはかることだ。」というのが師匠の大学人としての信念でしたが、とにかく、学生とは真剣に向き合っておりました。

紛争当時の運動学生達の罵詈雑言入りの難解なビラや張り紙に対抗して、吉阪学部長は間髪を入れずに模造紙一杯の毛筆の「告示録」を張り出して対抗しておりました。時々、コーラン、仏典の一節も入れて、君たちの求める真理とかたちとは如何なるものや、と論争を挑んでゆきました。あの時期は、学生と教師の大学における真剣勝負の一場面といってよいでしょう。

私はこの時期、大学から助手の身分を与えられており、学生達との問答に付き合いつつ、「21 世紀日本の国家、国土像」を求める政府（佐藤栄作内閣）主催の大掛かりなコンペティションに参画しておりました。

このコンペティションには、東大、京大他の学協会が多数参加し、２年がかりのものでしたが、早稲田チーム（21 世紀の日本研究会）は文系、理系の枠を越えて、教師、研究者が、タコツボ型の研究室の旧弊を破って、全学的に取組んだものです。このチーム編成は師匠が行い、実務の取りまとめは私が命じられて、これに当たりました。

私としては大学院生時代、全国土を見て歩いた経験が大いに役立ったことでした。「アニマルから人間へ」「ピラミッドから網の目へ」と表題を付けた早稲田案は最優秀賞を獲得しました。その時の賞金で、研究の参加者ほぼ全員で、学生も連れ、ロシア船バイカルを借りて、横浜から香港旅行をしたことが思い出されます。

３．大学、交流、平和

大学紛争の方は、ユニークな吉阪理工学部長の登場もあって、1972 年頃には山場を越え、収束に向かいました。

大任を終えた師匠は再び研究と教育に戻ることになりましたが、この頃、早稲田大学理工学部都市計画コースも、韓国や台湾など、アジア諸国からの留学生も増え、国際的な雰囲気となってゆきました。

留学生の案内で、日本人学生共々、その国の都市・地域の調査に出掛けることが教育・研究のプログラムの一つとして定着したのもこの頃からです。

この間、師匠は日本の学会などの役職を多く引受ける年代となり、海外の国際会議に出張したりしておりましたが、晩年、最も力を入れたのは日中学術交流でした。

日中国交が回復したのは 1972 年ですが、次の年、1973 年 11 月に「日中建築技術交流会」を同志と計って設立しております。ほとんど中国事情など解らない中で、幅広く接触の窓

口をつくろうと、1974 年 4 月、自ら団長となって訪中を果たしました。

「見方考え方の異る二つの国の人々は、何千年もの間互いに影響し合って過ごして来た。その性格の差は、丁度夫婦の場合のように喧嘩になることもあろうが、血の中にも、顔貌からも何かと通い合うものが存在して、別れられない存在なのだ。

建築というものは、工学的技術的な面と共に、生活や体制の価値的な面をも含めて総合される結果だから、これを通じて両国が交流し合うことは、友好促進のため、大変有効なものとなるだろう。日中建築技術交流会が少しでもそのお役に立てば幸いだと考えている。

既に若い人たちの間に、テーマ別の研究会などが持たれているのは、誠にたのもしいことである。

これまでの交流で感じられたことに、日本の場合は誰かが最先端、最高水準を達成したとすると、忽ちにして皆がそれに追随して一様に普及して格差をなくす方向に働きやすい体質をもっているのである。四季の変化の激しい中での生活は、機を見るに敏であることが生存を保つみちだからであろうか。

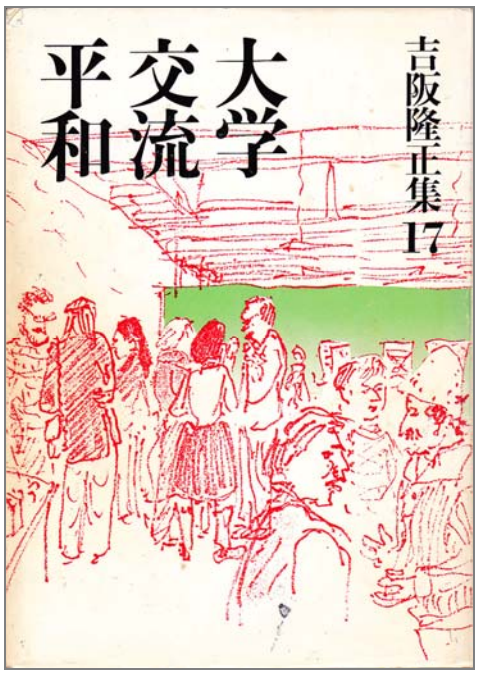
これに引きかえて、大陸では、一人が先端的な高水準に達するとすれば、厖大な底辺の上に立つので、ヒマラヤほどに大きく高く支配することになる。それ故これが全体の共通財産となるまでに大変な月日を要するともいえる。……」 [1)]

師匠は 1974 年の訪中以降も毎年の様に交流会のメンバーを引連れて中国各地を訪れ、そして、中国からの訪日団を受入れて日中交流を深めました。中国語の勉強にと、自宅トイレの壁に中国語の単語、短文を張っていたのを思い出します。

しかし師匠、吉阪隆正先生は志半ばで 1980（昭和 55）年、63 才で急逝されました。

今、日中間で「尖閣諸島問題」が急浮上して、日中ともに国民感情が悪化しています。この事態についてはこれまで交流を深めてきた私の中国の友人達も心を痛めております。師匠の言葉を借りるならば、「両国は夫婦のようなもの」です。これについて、今回の尖閣諸島問題の当事者であった丹羽宇一郎前中国大使の最近の著作 [4)] にある、隣国同士、嫌だからといって引越しできない間柄であり、平和に解決するほかない課題であり、「待つ」「休む」のカードを使って、長期的視野と現場感覚で政府も事に当たるべしという考え方は、吉阪先生の考えと通じるものを感じます。

吉阪隆正集１７の表紙



資料：『吉阪隆正集 17　大学・交流・平和』吉阪隆正 1985 年　頸草書房

４．大学の国際化とグローバル人材の育成

近年、日本の経済などのグローバル化に呼応して、政府、文部科学省は大学におけるグローバル人材の育成を強力に進めるとしています。

文部科学省に設置された「グローバル人材育成会議」によるグローバル人材とは、1. 語学力・コミュニケーション能力、2. 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、3. 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティを挙げています。

これについて、本研究所の『ＵＥＤレポート 2013 夏号』において特集しましたが、日本のいくつもの大学は積極的な取組みを始めています。

この特集の巻頭言に「大学は世界化（グローバリゼーション）とどう向き合うか」を書きながら、越中ふんどしを締めて地球を飛びまわり、世界の平和を願い、大学の国際交流に身を投じていた師匠、吉阪隆正先生を改めて想い出しているところです。

さて、昭和年代が終わり、平成生まれの青年たちが、万事グローバル化の進む時代状況の中、国際的な舞台で「個」を磨き、どんな活躍をするか、大いに期待しているところです。

【注】

1) 『吉阪隆正集 17 大学・交流・平和』吉阪隆正 1985 年　頸草書房
2) 『モデュロール（黄金尺）』ル・コルビュジエ 1953 年　美術出版社
『吉阪隆正集 8 ル・コルビュジエと私』吉阪隆正　1984 年　頸草書房
3) 『人間尺度論』戸沼幸市　1978 年　彰国社
4) 『北京烈日』丹羽宇一郎　2013 年　文藝春秋

(2013. 06. 25)